

## 6 不登校改善事例

### 事例 1 慢性型、本人要因

小学校第6学年のAさんは、体調が悪いということで4年生の2学期から登校できなくなりました。当初、担任は毎朝誘いに行ったり、放課後に家庭訪問したりしましたが、本人に会えない日が続き、次第に連絡が途絶えていきました。

#### 初期対応

- Aさんに関する前学年までの様子等の情報収集を行う。
- 新担任は、家庭訪問をして、家族も含めた関係づくりに取りかかる。
- 教育相談部会で関係機関との連携等の方針を決める。

#### 回復に時間がかかるケース

#### 取組

- 1、2週間に1度程度の家庭訪問を続け、Aさんの状況に応じて、興味のある話題を提示する。
- できるだけ早い段階から状況に応じて、中学校入学に向けた学力支援を行う。
- 中学校と連携し、入学後の対応を協議する。
- 定期的に保護者と話をする。

#### ポイント

- 登校刺激の時期を適切に判断する。 → 保護者と連携した取組を続ける。
- 子どもの状況に応じて登校刺激の内容を工夫する。 → 話題転換、学力支援等
- 登校後の対応まで考えて行動する。 → 小中の連携

### 事例 2 急性型、学校要因

中学生のBさんは、第2学年になってから休みがちになってきました。担任が本人に理由をたずねますが、よく分かりません。気になって家庭訪問をしたところ、母親から、部活動で友人関係のトラブルが起こり、不登校寸前であることを知らされました。

#### 初期対応

- 担任は、部活動顧問と事実確認を行う。  
→ 他の教員や周辺の生徒からの聞き取りもそれとなく行う。
- 家庭訪問をして保護者と話し合う。 → 情報収集する。
- スクールカウンセラー等と連携し、支援体制を整える。

#### 早期回復が望めるケース

#### 取組

- 学級や部における集団づくりを見直す。 → Bさんへの受け入れ態勢を整備する。
- 家庭訪問をして、Bさんとの関係維持に努める。
- 支援チームで、Bさんの復帰プログラムを作成する。

#### ポイント

- 早期発見・早期対応に努める。  
→ 子どもの変化を敏感にキャッチし、おかしいと感じたら行動する。
- 家庭訪問をして保護者と話し合う。  
→ 子どもや保護者の不安な気持ちに共感し、信頼関係をはぐくむ。
- チームで役割を決め、計画的に対応する。